第五節　民俗芸能、娯楽

1　獅　子　舞

町内の各部落には夫々鎮守があり、春か秋にお祭りを行っている。お祭りには、殆ど例外なく獅子舞いが出た。当地方の獅子舞のように、大きな幕の中に多くの人が入って舞う獅子を百足獅子というが、百足獅子の舞い方には七・五・三の舞と蛇頭の舞がある。どちらにも独特の良さがあって、見る人を楽しませてくれ、祭りには欠かせないものである。ただ、最近は舞い手がいなくなって、獅子舞を出せない部落があるのは残念なことである。

本町の獅子舞も、七・五・三の舞と蛇頭の舞に分けられ、昔ながらの舞い方が伝承されているのは喜ぶべきことで、この舞の保存のため、昭和四十五年六月三日、鮎貝八幡神社の七・五・三の舞と、浅立諏訪神社の蛇頭の舞を、白鷹町指定無形文化財とし、永くその伝統的な舞の保存継承に力を入れることになった。以下、それぞれの舞いについて概説してみよう。

鮎貝八幡神社獅子舞

鮎貝八幡神社の獅子舞は、七・五・三の舞である。七・五・三の舞とは、舞い手の足の運び方からつけられた名称で、第17図のように、七歩進んで、五歩退き、三歩で元の位置に戻る足どりになる。これを「七進五退三転」といっている。この舞の歴史は明らかではないが、「神社誌」、獅子頭などから判断すると古いものである。

第17図：

第18図：鮎貝八幡宮古獅子頭

⑴　獅子頭

獅子頭は唐獅子で、雄獅子と雌獅子とがある。舞に出るのは雄獅子で、雌獅子は舞には出ない。どちらも檜彫に布を貼り、それに朱を塗ったもので、重さは二貫匁（七・五キログラム）ある。雄獅子は真白なたて髪を着け、耳は赤い。雌獅子は、たて髪がなく、耳は黒い。雄獅子・雌獅子共に勇猛な形相で、悪魔病魔を退散させるにふさわしい。雄獅子が舞に出ている間、雌獅子は本殿で待っている。

現在の獅子頭の作者名は不明であるが、正徳二年（一七一二）京都公卿の作と伝えられており、鮎貝宮城助四郎が青苧販売のため京に上った折りに、この獅子頭を求め、舞い方を伝授されたと伝えられている。

八幡宮にはこの他、さらに古い獅子頭がある。形も最近のものとは大分異なり、平べったい形が特徴で、いかめしさには欠けるが、それなりに味がある。昭和五十年末、この獅子頭の写真を撮り、文化庁美術工芸課田辺三郎助氏に送って、その製作年代についての意見を徴したところ、「桃山―江戸初期期あたりのローカルな作品」との事であった。写真による推定とはいえ、これまで伝えられてきた年代より更に遡り得る要素を持ったことになる。

いずれにしても、古い歴史をもつことだけは確実であろう。

⑵　七五三の舞

七・五・三の舞は先述の通り、七進五退三転から出た名称である。この動作を三回繰り返すと「負う」態勢に

入る。「負う」とは気負うことで、獅子は一段と勢をまし、荒々しく、激しく上下動する。見ても面白い場面で、普通「ダタンコ」という。ダタンコが終るまで一舞いであるが、五、六年以上の経験がなければ、ここまで続いて舞うことはできない。ダタンコに入る前の五退の第一歩のとき、舞い手は獅子頭を勢よく引いて合図する。これを「巻く」という。

獅子が街に出て、各家々の門前で舞い、次の家に移るとき、または、獅子が本殿に入るとき、「見返し」とよばれる舞をする。名残りを惜しむ風情がにじみ出るもので、一五年以上のベテランでなければ舞えないという。「見返し」には、定まった型がないだけに難しい。

(3)　祭りにおける獅子関係の行事

❶精進がため

祭りの一週間前に一同集合、打合せの後一献くみかわして精進がためをする。この後は、祭典が終えるまで肉・魚を断ち、精進生活に入る。

❷練　習

伝統ある獅子舞いの保存継承は、練習の上に成立っている。一週間毎晩神社の境内で、舞い手・口取り・笛・太鼓全員が練習する。獅子頭も毎晩出て監督する。

❸幕付け

夜祭りの昼過ぎ社務所に集合、幕付けをする。幕は、雪紋様のついた木綿布一三反を縫い合せたものである。幕付けが済むと、獅子頭を酒で拭き清める。

❹祭　り

獅子舞は、夜祭りと昼祭りに出る。夜祭りには街中を廻り、予め定めてある「踏み場」で舞う。昼祭りは境内のみで、堂めぐりを三回する。昼祭りの後、獅子連の永年勤続者の表彰を行う。

❺スドケ（精進おり）

祭りの翌日、獅子連一同が会合し、精進おりをする。このとき「トウワタシ」が行なわれる。当番を申し送る行事で、謡をうたい、盃を交換して新しい当番が誕生、一年間諸連絡に当る。

浅立諏訪神社の獅子舞

諏訪神社の獅子舞は、蛇頭の舞である。「ジャガシシ」または「ジャガッシャ」と呼ばれる蛇頭の舞の特徴は、蛇が地面を這うような動きにある。七・五・三の舞の上下動に対し、蛇頭の舞は平面上の動きである。緩急おりまぜ、蛇行しながら周囲をにらみつけるようにして舞う様は、まさしく諏訪明神の化身と見える。見る人が思わず手を合わせるのも宜なるかなである。以下、祭り時における獅子の様子をみよう。

⑴　獅　子　連

総勢二五人。希望者で組織している。祭日前の精進は別に規定しない。三日前から練習に入り、社前で稽古用獅子頭をもって練習をする。太鼓、笛も一緒に練習する。

祭り当日の服装は、白装束に、脚絆をつけ、白足袋・わらじ履きである。

⑵　蛇頭の舞

夜祭りの昼食後集まって、幕付けをする。その後、酒で獅子頭を磨き、社殿に納めておく。

獅子が社殿から出る時は、最初に獅子頭が受取り、石段の上で六回「見返し」をする。七・五・三の見返しと異なり、石段の中央から右に進み、端の所で見返し、中央に戻り、次いで左端まで進んで見返しをする。この動

作を合せて六回繰り返す。見返しの際は、獅子頭を高く持ち上げ、周囲を見返す様を演ずるもので、蛇頭の舞の一つの見所である。獅子が前に進むときは、獅子の前にいる「相撲」の背中に合図を送る。こうして社殿を出た獅子は、村へ出るが、途中、鳥居前の太鼓橋、国道入口で見返しを六回ずつ繰り返す。

舞い方について、足取りなどの規定はなく、蛇体が進む様を表現できるように動く。ある時は真直に、ある時は蛇行し、またある時は後退すると見せて前進したり、自由自在の動きになる。腰を据えて舞うのが大切だという。腰がふらつくと、獅子頭が上を向き、舞いに魂が入らないと言われている。

蛇頭の舞の見所の一つに、「荒び獅子」がある。獅子が荒れるときは、足取りがせわしく、荒々しくなる。そして、笛・太鼓の方を向いて、大きく口を開け、「バクッ」と閉じる。すると、笛・太鼓はそこから調子を変えるので、獅子はそれに合わせて荒び始める。笛・太鼓の調子が替らないと、荒び獅子にはなれない。最初だけは笛・太鼓が基準になり、二回目以後は獅子中心となる。

獅子舞は、夜まつりと昼祭りと二回出るが、獅子には相撲の他、獅子看板・からくさ看板・すえうろこ・すそかじうろこ・うろこ看板などが付く。うろこ看板が、看板の総取締り役である。

蛇頭の舞は自由で奔放である。

2　民俗舞踊

いつの世にも、人間が生活してゆく上には娯楽が必要である。それは、今日の疲れの慰安であり、明日への活力ともなるからである。ラジオもテレビも無かった頃とて、同じであった。

その頃の娯楽は、主として芸人によるものであった。萩野村文書に、次のような興行届がある。

興　行　届

一、興行の種目　手人形
一、興行の場所　白鷹村大字萩野一、五五〇番地
一、興行の時間　明治三十八年九月二十二日午後六時より十二時まで
一、木　戸　銭　壱人ニ付金弐銭
一、此　税　金　四拾銭

右興行致シ度候間税金相添此段御届仕候也

明治三十八年九月二十二日

右届人　佐藤亀吉

白鷹村長　人見其次殿

文殊堂祭礼ニツキ手踊寄席致シ度儀ニ付願

来ル十月一日ヨリ同三日迄三日間当村文殊堂拝殿ニ於テ手踊寄席仕木戸銭弐銭ツツ受取為相見度存候間御成規ノ寄席税金御上納被仰付御許可被成下度此段奉願候也

明治十年九月二十九日

鮎貝村願人　片倉甚右エ門
右　里　正　岩沼　大之助

山形県令三島通庸代理
山形県大書記官　薄井　竜之殿

これによると、手人形・手踊などに人気があったものとみえ、午後六時から十二時までとか、三日間の興行とか驚ろくほど盛んである。こうした興行物とは別に、信心から村民が神社へ奉納する形で行なわれたものもある。それらについて、以下概説する。

(1) 栃窪奴

栃窪奴は鮎貝八幡様の祭礼に奉納されたもので、全員栃窪をあらわす㊦の帯をしめていた。行列の順序は、第19図の通りであった。

槍の長さが二間（四メートル）あったので、十余人の槍持が二間おきに並ぶため、随分長い行列であったという。この奴ふりは山口奴からの分流であるらしい。山口奴も、以前には祭礼時に奉納されていたようである。

(2) 松岡田植踊

この田植踊は、大正の末、畔藤の菅原惣七が吉野村小滝から移入したものである。畔藤、雷神社の祭礼には、毎年奉納され、その後で、部落の家々を廻る。

一行の人数・持ち物・服装は、第5表の通りである。

第5表　田植踊

役名	人数	持物	服装
中太鼓	2	太鼓	白装束、白足袋、わらじ、羽織、黄色の鉢巻
げんないぼう	3	げんない棒	白装束、白足袋、わらじ、羽織、黄色の鉢巻、げんない棒
そとめ	6	ビダサラはし、扇	花付菅笠、女装束、ボンボラ下駄、扇（はし、ビダサラ）

道行きに入って、一般の家では七人で踊るが、菅原惣七家、踊り手の家及び神社に奉納する時は全員で踊る。踊りの体形は第21図である。

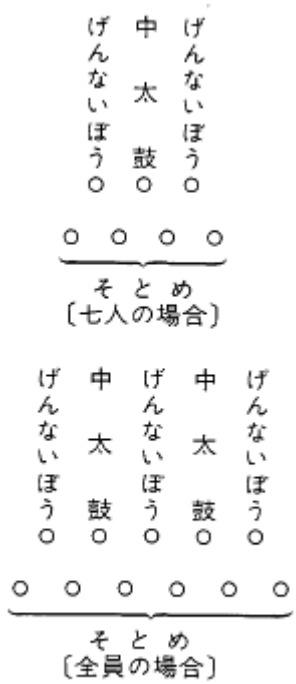
踊りは、踊り手の口上、歌い手の唄と踊りが交互に披露され、間に賞め言葉、返し言葉が入り、華やかに展開される。唄は一番から八番まであるが、その中から、一番だけ記しておく。

第一番　お正月

代かき――エーと　こりゃ御亭様御家に参るか御免なれ　明の方から大田植小田植苗とり代かき供には七、八百人
ばかり舞込んだ　まづもってお目出度うござる　代を見れば代のかき様も練り練り練っぱりとして良い代なり　姉
アだ姉アだ　下の小佐の小柳の下迄十六七の姉さんが縫じらしをぶっ揃えたる如く大苗小苗のないようにばらばら
ばらとやってくれまいかなぁ姉アだ

第20図：田植踊り

唄　一、お正月のこらやんが　お目出度うなごんでみな祝い
　　二、えびす大黒のやんが　ちょうおしさんのさんがでな祝



第21図　踊りの体形

（先　払）
（鉄　箱）
（槍　持）
（　〃　）
（　〃　）
……
（槍　持）
（　〃　）
十余人

第19図　栃窪奴
行列順序

3　瞽女・祭文・神楽

昭和十五年頃まで、越後瞽女がよく来たものである。盲の女が連れの女に手を引かれ、三人一組でやってきては、三味線を弾きながら唄をうたって門づけして歩いた。どの部落にも瞽女宿になる家があり、宿に泊る夜は、附近の人を招待して芸を見せた。聞きにきた人たちはざるを廻し、その中に銭を入れて返した。瞽女は毎年同じ組が来るので、宿も同じであったから、「仁右エ門の瞽女」とか「太助のごぜ」などと呼んで親しんでいた。

祭文語りなども同様で、宿に泊り、附近の人たちを招いて楽しんだ。

黒鴨に神楽があった。秋の取入れが済んでから、獅子を持って各部落を門づけして廻った。一行には太鼓・笛・三味線などがあり、人数も多い時には十人ほどにもなった。

黒鴨神楽の舞には、悪魔払いをする獅子舞・おかめ舞・ざとう舞・万歳・和唐内踊り・鳥さし舞、それに、阿呆舞などがあった。舞の他、皿まわし・バチトリなどもあり、賑やかな面白いものであった。この神楽は明治の末、実淵川で木流しをやっていた頃、木流し人足として働きに来ていた人から習ったと言われている。次に、神楽唄を一つ書き留めておこう。

神楽（かぐら）と書いた二文字は
神楽（かみたの）しむと読みたまい
神も喜ぶよホイ　アー御神楽（みかぐら）よホイ

（黒鴨・佐藤虎五郎唄より）

4　民謡シンボエー

萩野に、民謡シンボエーが残っている。昔、萩野寺部落の寺僧と、寺の門前の娘おいちとの恋物語をうたったものと言われている。

シンボエー
弘大寺に虎の皮を着せてな

千里走れとは　やさ無理だとエー
ソレドテ　ドウシンベ
おいちがことなら何でもよござんすエー

シンボエー
弘大寺の流し尻を見もせば
　鯉の骨など卵のからなどエー
ソレドテ　ドウシンベ
おいちがことなら何でもよござんすエー

この民謡は、一時萩野に生まれたものと考えられていたが、実は青森・秋田・新潟と日本海岸沿いに分布し、特に新潟県下に多いことが分った。『日本民謡大観』などにもこの唄のことが書かれてあり、それには、新潟県魚沼郡新保村の鶴謡山広大寺が発祥地で、安永の頃、江戸で唄われたものであろうと述べている。唄の始めの「シンボエー」というのは、新保村の名が織り込まれたものであろうか。

「シンボエー」の発祥が萩野ではないにしても、安永年間（一七七二～八〇）の唄が現在歌われていることは、その唄を運んできたのは誰かという問題と共に、興味のあることである。

5　民話と伝説

「むかしあったけど」で始まり、「とうびんと」で終る昔話は、子どもの頃、よく炬燵のまわりで、囲炉裏のそばで、そしてまた寝床の中で聞いた。語り手は、その家々で異なり、祖母の場合、祖父の場合、ある家では母の

場合などであった。子どもたちは、同じ話を何度でも繰り返しせがんで聞いた。聞くのは大抵夜で、日中むかし話をせがむと、「昼間むかし語ると、鼠に小便かけられる」と言って、断られた。

昔話は色々あったが、最も一般的なものは、猿聟話・牛方と山姥・くいごこむかし・法印と狐・笠地蔵・鼠浄土などで、これらは殆どの人が知っていた。いつ、誰がつくったかなど一切分らない昔話は、口から口へと語り継がれ、人から人へ、地方から地方へと移り変る中で、少しずつ郷土色を帯びてきた模様で、今では格好の研究材料になっている。

白鷹町一帯にも数多くの昔話が語られていたことは、昭和四十五年二月発行の、滝野字折居の海老名ちゃう昔話集『牛方と山姥』（武田正編）や、同四十六年十月発行の、貝生工藤六兵衛昔話集『とうびんと』（武田正編）などを見ても明らかであろう。

白鷹町には伝説も亦多い。大きな石や木にまつわる話、寺や神社に関する話、地蔵さまについての話、清水の由来など、内容は様々であるが、伝説の場合には、実在のもの―山・大木・大石等々―にまつわる話であるのが特徴で、歴史上の人物がそれに絡まる場合もある。神秘性が色々な伝説を生みだすものであろうが、それが何代もの長い間語り継がれてきたことは、人々の心に何かを与え続けてきたからであろう。白鷹町周辺の伝説については、荒砥高等学校社会クラブが、昭和四十八年三月に『しらたかの伝説』を集録発行している。